
お加世

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お加世

【Nコード】

N6898I

【作者名】

栗原峰幸

【あらすじ】

人殺しの嫌疑で北町奉行所に捕えられたお加世。彼女には過酷な拷問が待ち受けていた。だが、拷問で耽美な喘ぎ声を漏らすお加世。その彼女の胸中は？

北町奉行所の牢内に一人の若い娘がいた。歳の頃は十六程だろうか。牢内できちんと正座を崩さず座っている。

この娘の名は「お加代」と言った。お加代は呉服屋の亀井屋が娘であつたが、人殺しの嫌疑でお縄になつたのである。

事の次第は出会い茶屋での、大工の清吉殺害に端を発する。茶屋の主にも清吉とお加代が出入りするところが目撃されていたし、二人の争う声も聞かれている。もはや、お加代の清吉殺しは明白と言つてよかつた。

お加代が召し捕らえられ、奉行所で囚人衣に着替える際、無数の傷痕がその白い柔肌に確認された。同心、森田一徳はその傷についてお加代に問うたが、お加代は一切口を噤んで話さなかつたという。そして無論、清吉殺しについても一切話さなかつた。お加代は口が利けないのではないかと疑いたくなるほど、喋らなかつたのである。

翌朝、お加代は下役人に連れられ、別室へ引き出された。その部屋には森田一徳と同心、木村陣内が座しており、天井から吊るされた麻縄や、水を汲んだ桶が見受けられる。

お加代がこれから拷問を受けるのは間違ひなかつた。

当時、奉行所においても、小伝馬町の牢屋敷においても拷問は取り調べの一環として行われていた。それは容疑者が自白をしない場合にのみ許されることとなっており、当然ながら所定の手続きを踏まなければならぬ。また、拷問以前に自白を引き出せないのは同心や与力の「力量不足」とされていたのである。

麻縄を見たお加代は一瞬、ほんの一瞬だが、唇を緩めた。それはまるで笑ったかのように見える。既に化粧も落とされたお加代であったが、薄く笑ったその唇は艶があった。いや、唇だけではない。顔の色艶も良く、見る者を魅了する程の美しさを湛えていたのである。

森田一徳は己の邪心を払拭するが如く眉をひそめ、「始めい！」と怒鳴った。

お加代の身体に麻縄が掛けられていく。森田一徳はジツとお加代の顔を見つめる。そして言いようのない、疑念を抱いた。

ここで大抵の者は、これから起こることに恐れ戦き、取り乱すものである。女子であれば尚更だ。それがお加代の場合、まるで酔っているかのような顔をしているのだ。瞳は虚ろに潤み、口は半開きで今にも吐息を漏らしそうである。それはお加代の身体が吊り上げられても変わることはなかった。

やがて「敲击」が始まった。ビシッビシッと下役人の振るう笞が、お加代の身体に容赦なく敲击つけられていく。

「ああ……」

一同が首を捻る。お加代の口から漏れたのは、呻き声にしては些か艶やかだったからである。

「手緩い！ もっと激しく責め立てい！」

森田一徳の怒声が飛ぶ。打ち方は更に激しく、お加代を打ち据えた。衣類がはだけ、柔肌が露になる。それでも森田一徳の命の下、激しい「敲击」が続行された。

「ああっ、んんっ、はあっ……！」

お加代は眉間に皺を寄せてはいるものの、決定的な苦痛を与えているとは、居合わせた誰もが思っていなかった。むしろ快樂を与えているとさえ思えたものである。

江戸時代、囚人への拷問には一定の作法があった。ことさら女囚に対しては配慮がされていたものだが、実際には有名無実であった

ことは言うまでもない。

しかしこの時の北町奉行、加納主税は規律を重んじ、人徳のある人物であることで知られていた。配下の与力、同心はもとより、下役人から目明かしの一部に至るまで彼を尊敬する者は多かったのである。無論、森田一徳とてその一人であった。

しかしながら、いくら責めても余裕の表情を崩さないお加代に、森田一徳は苛立ちを抑えることが出来なかった。現にお加代は、立ち上がった森田一徳の前で薄笑いを浮かべている。本来ならばとくに失神して、水を掛けられてもおかしくない程の責めを、お加代は受けていた。

「貸せい！」

下役人から笞を奪い取った森田一徳は、自らお加代の柔肌を打ち据えた。激しく込み上げる憎悪を笞に込め、所かまわず打ち据える。白く、たわわに実る乳房が、瞬く間に赤く腫れ上がる。

「ああ、んんっ……、はうっ……」

だが、それでもお加代は妖しい薄笑いを浮かべていたのである。

「ぬぬっ、こやつ……！」

森田一徳は激怒した。己が愚弄されていると思ったからである。そして手に握る笞を、先の割れた青竹に持ち替えた。

これは当然、違法な拷問であった。そもそも女囚の場合は衣服を脱がしてはならない。

ただ状況からして、お加代が下手人であることが明白であるにも関わらず、自白を引き出せない焦りが森田一徳にはあったのだろう。森田一徳がお加代のはだけた衣類を、直すことはなかったのである。森田一徳は容赦なく、青竹を振るった。

「はあっ……、あうっ……、くうっ……」

桜色の乳首にも容赦なく青竹が割り込んでいった。青竹の割れた先が柔肌に食い込む。それは何度も食いちぎるようにお加代を苛めた。

さすがにお加代も、この責めには苦痛の表情を露わにする。

「んんっ……、はうっ……、ああっ……」

しかし口を突いて出るのは快楽を思わせる喘ぎ声だった。

「うぬっ！ これでもかつ！」

森田一徳の形相は変わり、息を切らしながら激しく青竹を振り続けた。同席した木村陣内や下役人たちは一同に、悪鬼の形相をした森田一徳に恐れ戦き、退くより他になかった。

「やめい！ 森田、それまでじゃ！」

その声に森田一徳は我に帰り、振り上げかけた手を止め、振り向いた。そして驚愕する。

そこには北町奉行、加納主税が立っていたのである。

「森田、比度の責めは行き過ぎぞ。お主の気持ちもわからぬではないが堪えい」

加納主税は静かに森田一徳を諭した。

「申し訳ございませぬ。この娘が自白せぬ故……」

森田一徳はようやく我に返り、己の犯した過ちに気付いた。そして加納主税と森田一徳はお加代を見た。あれだけの責めを受ければ、当然失神をしていると思つた二人である。しかしお加代は虚ろな瞳を二人に向け、口元に薄笑いを浮かべていた。

さすがにこれには加納主税も一瞬、怯まずにはいられなかった。

しかしすぐに気を取り直すと、お加代を牢に戻すよう命じ、医師を呼んだ。お加代の傷の手当をするためである。囚人にここまでの配慮をする奉行など、そついたものではない。これからも加納主税の人柄が窺えるというものである。

奉行所の一室で森田一徳は加納主税にいきさつを報告した。

「ふーむ……」

それを聞いた加納主税は深く目を瞑り、両腕を組んで唸つたものである。そして続けた。

「のう、森田……。殺された清吉という男は、女を苛むことで己の欲を満たしていたらしい。そこまでならば男と女の間柄、口を挟むつもりはないが、清吉は次々と女を虜にした揚げ句、女に飽きると銀次という男と共謀し、その筋の女郎屋に売り飛ばしていた悪党だったそうな」

「なるほど。それで、あの娘の身体の傷も……。普通の者ならば打たれば何かしら言うものの、あの娘は何も言わないばかりか、快楽に似た顔を崩さぬ始末。しかし、いくら悪党殺しとは言え、人殺しは人殺し。死罪は免れませぬ」

森田一徳が加納主税の顔を見つめ、きつぱりと言った。

「そこよ。自白せぬうちは刑も執行できぬ。それにお主も責め方の手練者なれば、あれだけの責めを受けてどうなるかわかるう。それをあの娘、笑っておった。儂もこの歳で背筋が寒くなったわ……」

加納主税は目を開けると、眉間に皺を寄せて、静かに言った。

そこへ下役人が現れ、恭しく頭を下げた。

「ただ今、入牢中の亀井屋が娘、加代が息を引き取りましてございます」

森田一徳の血相が変わった。

牢に急行した加納主税と森田一徳は、満足そうに薄笑いを浮かべている、お加代の遺体と対面することになる。

「のう、森田……。我らは真実を追求するのがお役目だが、時に人とはまったくわからぬものよのう……」

お加代の死に顔を見た加納主税が、目を瞑って合掌した後、やり切れない表情で唸った。

「お奉行様、比度の一件はご定法より逸脱しました、私の責めが原因でございます。私めに何なりと罰を……」

森田一徳が崩れ落ちる。その先は言葉にならなかった。加納主税はしゃがみ込むと、そんな森田一徳の肩を軽く叩いた。

「立派な娘だった病だったのだ。そうだ、これは病だ。病の者を

罪に問えるはずもなかるう。森田よ、清吉殺しの下手人は他におけるぞ」

森田一徳がくしゃくしゃになった顔を上げ、加納主税を見上げる。「森田、娘に美しく死化粧を施し、遺体は亀井屋に引き渡すのだ」遺体が遺族に引き渡されるといことは、即ちお加代が罪人ではないということの意味していた。確たる証拠があり召し捕らえられ、獄死した場合は罪人として扱われ、非人に引き渡されるのが通例であった。それ故、比度の処置はまったく異例のことであったと言えよう。

更に周囲を驚かせたのは、お加代の葬儀に加納主税と森田一徳が参列したことだった。その際、加納主税は亀井屋に「立派な娘子でござった」と言い、香典に大枚を奮ったという。これでお加代が清吉殺しの下手人ではないことが、巷に認知されるようになり、亀井屋も商いを続けることができたわけである。

一方、森田一徳の違法な拷問への詮議も行われたが、加納主税は「勝手に腹など切ってはならぬ」と言い置いた上で、半月の謹慎を言い渡した。

そして毎年、お加代の命日に墓参りをするよう命じたのである。森田一徳は加納主税の命を忠実に守り、それからというもの毎年お加代の墓参りを欠かさなかったという。

お加代が獄死してから三月の後、森田一徳の手により、清吉と共に謀して女を女郎屋に売り飛ばしていた銀次がお縄になった。女を殺害した嫌疑を懸けられて召し捕らえられたのである。

銀次は少々の「敲き」で喚きちらし、失禁までした揚げ句、女殺しを自白したという。

結局、銀次は江戸市中三ヶ所引き回しの上、小塚原の仕置場で磔刑に処された。

その後、銀次が清吉と蔓んでいたことから、「清吉殺しも銀次に

よるもの「と奉行所は判断を下した。これにて清吉殺しの一件は落着いたのである。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6898i/>

お加世

2010年10月8日15時26分発行